

### 文学にみられる芦屋

～芦屋を舞台とした主な作品と作者～

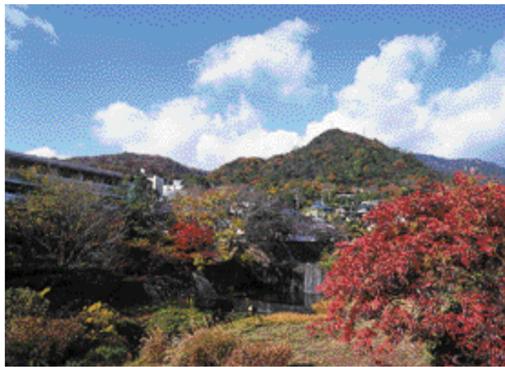
- 【奈良時代】
  - 「万葉集 芦屋処女(あしやおとめ)の伝説 田辺福麻呂 / 高橋轟麻呂 / 大伴家持
- 【平安時代】
  - 「伊勢物語」 在原業平
  - 「後拾遺和歌集」 藤原通俊撰 / 能因法師
  - 「夫木集」 藤原俊成
  - 「大和物語」 在原業平
  - 「千載和歌集」 藤原為実
- 【鎌倉時代】
  - 「新古今和歌集」 藤原定家撰 / 撰政太政大臣(藤原良経) / 在原業平
  - 「新勅撰和歌集」 藤原俊成
  - 「続後撰和歌集」 藤原為家撰 / 少将内侍 / 津守国冬 / 順徳院 / 従二位家隆 / 後鳥羽院 / 前大納言為家
  - 「続拾遺和歌集」 藤原為世撰 / 衣笠内大臣 / 前中納言定家
  - 「新後撰和歌集」 藤原為家撰 / 前内大臣 / 順徳院
- 【室町時代】
  - 「新千載和歌集」 藤原為定撰 / 宣秋門院丹後
  - 「後拾遺和歌集」 藤原為遠・為重撰 / 正三位知家
  - 「新統古今和歌集」 藤原雅世撰 / 後龜山院 / 権中納言雅世 / 雲林院 世阿弥
  - 謡曲「藤栄」/「処女塚」求塚 作者不詳
  - 「道ゆきぶり」 前伊豫守貞世朝臣
- 【江戸時代】
  - 「旅行日記」 椎木才庵
  - 「革命紀行」 蜀山人
  - 「類題鱧玉集」 加納諸平撰 / 伴林光平 / 美蔭
- 【明治時代】
  - 「播磨巡覧記」 田原相常
  - 「聖なる都 京都」 ビエール・ロチ
  - 「業平朝臣東下りの姿」 星野天知(文学界)
  - 「黙歩七十年」 星野天知
- 【大正時代】
  - 「山陽行脚」 エフ・スタール
  - 「海郷抄」 児玉隆男
  - 「芦屋にて」 柳澤 健
  - 「芦屋風景」 生田春月
  - 「蒼白い月」 徳田秋声
  - 「星恋」 山口誓子
  - 「日本詩壇」 吉沢独陽
  - 「池乃玉藻」 松田直一編
- 【昭和時代】
  - 「めでたき風景」 小出楯重
  - 「枯木のある風景」 宇野浩二
  - 「芦屋にて」 与謝野晶子
  - 「芦屋より」 丹羽安喜子
  - 「猫と庄造と二人のをんな」 谷崎潤一郎
  - 「細雪」 谷崎潤一郎
  - 「歌風土記兵庫県」 富田碎花
  - 「兵庫讃歌」 富田碎花
  - 「淋しき生涯」 志賀直哉
  - 「年尾句集」 高浜年尾
  - 「垂直の散歩」 藤木九三
  - 「孤高の人」 新田次郎
  - 「海への会話」 早野台気
  - 「夜学生」 杉山平一
  - 「遺跡」 織田喜久子
  - 「口笛を吹く時」 遠藤周作
  - 「風の歌を聴け」 村上春樹
  - 「五月の海岸線」 村上春樹
- 【平成】
  - 「ミーナの行進」 小川洋子



「属目散趣」「歌風土記兵庫県」富田 碎花

盛岡市に生まれた富田碎花(一八九〇～一九八四)は、十八歳の頃、与謝野鉄幹、晶子の新詩社に入り、同郷の石川啄木らと短歌を病発し、大正二年(一九一三)知人斎田氏を訪ね、碎花は病療養に芦屋へやってきました。大正九年(一九二〇)に結婚。公光町、やがて宮川町へと移り、昭和五十九年に九十三歳で亡くなるまで六十余年の長い間、芦屋に住み続けました。

作品には、自分の名前を詠み込んだ「属目散趣」の「砕けたる花を名とした生涯を終わりに」に悔いあらめやも、また、「ロックガーデン」を詠んだ「歌風土記兵庫県」の「たたりとかけ極めこむ日もありて物の音絶えし岩場なりしがなどのほか、芦屋では、宮川小学校 精進中学校の校歌をはじめ、多数の校歌を作りました。戦後は、県下をくまなく旅し、「歌風土記兵庫県」や、「兵庫讃歌」を出すなど、広く兵庫県の風土と人を愛し、兵庫県文化の父と呼ばれました。



吉沢独陽

(一九〇三～一九六八)

詩人、関東大震災後、芦屋に移り住み、西山町に聖樹業詩園を経営。戦前、日本詩壇、創作、戦後は、坂本勝と、聖樹を刊行した。

芦屋在住四十余年の間の、登山に打ち込み、日本アルプスに七十数回登っている。芦屋の裏山はわが庭であった。

空の深きよせつなきよ

雉木林の細道の

赤い実が

ぼつりぼつりと

あるばかり

遠い昔の

おもいでに

雉木林の細道の

空の深きよせつなきよ

## 近・現代文学の舞台となった芦屋

問い合わせ 広報課 ☎38-2006

芦屋の名が初めて文学の上に見られるのは、日本で最も古い歌集「万葉集」です。また、阿保親王の子である業平が著した歌物語「伊勢物語」には、芦屋と深いゆかりがあったことがわかります。中世には、芦屋を舞台にした謡曲や「太平記」には打出合戦の記述をすることができます。近代、とくに精進村と呼ばれた大正から昭和の初めにかけて、芦屋は住宅地として開けていきます。美しい田園風景の中に、多くの文人たちが訪れ、芦屋を舞台にした名作が描かれました。今回は、近代文学および現代文学作品に描かれた芦屋を中心に、ゆかりの作家をご紹介します。



橋の上にて

深い深い谷川を見おろす

何かおとしてみたくなる

小石を蹴ると

スーッと

小さくなつて行つて

小さな波を舐がいて

ゴボーンと音がきこえてくる

繋がった!

そんな気持ちで物とする

人間は孤獨だから

(第一詩集 夜学生より)

杉山平一(一九一四)

詩人、昭和初期、東芦屋町に在住。現在は宝塚市在住。三好達治に見出され、抒情のなかに社会的感覚を備えた詩人として、また映画評論家として活躍。現在、本市の富田碎花賞選考委員。詩の中の橋は、阪急芦屋川駅北側の桜橋とされている。

橋の上

杉山平一



「細雪」「猫と庄造と二人のをんな」 谷崎潤一郎

谷崎潤一郎(一八八六～一九六五)が、大正十二年(一九二三)九月一日の関東大震災を逃れて、妻千代子と幼い娘子連れ関西に移ってきたのは、大正十二年十月、三十八歳のときでした。関西に移り住んだ谷崎は、芦屋や西宮などの風物を愛し、また引越好きといふこともあり、芦屋・西宮・神戸の岡本など転々とします。その間に、彼の代表作、「記・夢喰ふ猫、乱舞物語」「吉野葛」「春琴抄」「猫と庄造と二人のをんな」など、次々と発表していきます。谷崎が芦屋に住んで、ごく普通の町と庶民の生活を描いた「猫と庄造と二人のをんな」という名作があります。芦屋の旧国道(現国道一宮)沿いに金物屋を営む猫好きな男庄造の物語で、現在と違い昭和十一年頃ののんびりとした風景が印象的な作品です。

また、この旧国道筋は、「細雪」の舞台にもなっています。昭和十三年の阪神大水害の様子が、迫力ある描写で描かれています。

### 業平讃歌

早野台気

なつかしな

いにしへへと

夢ならで

けふあひまつる

五月風み前をわたれ

まばゆきはわが業平の

み名の大きさ



昭和初期の業平橋を走る国道電車

蒼白い月

徳田秋声

早野台気(一八九八～一九七四)

歌人、浜芦町に十九歳より住み、戦前から前短歌運動にかかわる戦後は、具体美術の創始者吉原治良らと親交をもち、自らオプジェ短歌と称し、歌集海への会話を遺した。

芦屋在住五十七年の間、郷土史家として、また芦屋短歌協会創設にも功労。昭和四十四年に芦屋市民文化賞受賞。

徳田秋声(一八七二～一九四三)は、大正九年(一九二〇)五月十一日、大阪時事新報社小説部で講義のため大阪へ来た。芦屋に住む長兄の養子夫妻を訪ねた。小説「蒼白い月」は、その際に書かれた作品です。

その時の秋声は、自分自身のこれからの人生と、徳田家の将来を思いながら、蒼白い月のかかる芦屋川の河口をそぞろ歩きます。

「そこは大阪と神戸とのあひだにある美しい海岸の別荘地で、白砂青松と言った明るく新開地の別荘地であった。中略、別荘路は整頓され洋風の建築は起こされ、郊外は四方に発展して致るところの山裾と海辺に、瀟洒な別荘や住宅が新緑の木立ちのなかに見出された。(中略)

私たちは河原そびの道路を歩いていた。河原も道路も蒼白い月影を浴びて、真白に輝いていた。対岸の黒い松原に、灯影がちらみ見えた。道路の傍らには松の生い茂った崖が際限もなく続いていた。そしてその崖に深い藪があった。月見草がさいていた。」(講談社、日本現代文学全集28)

### 芦屋風景

柳沢健

黄昏の海を見るとき、味のいい葡萄酒の匂がする。黄昏の松原を見るとき、紫いろの鳩の匂がする。黄金のちぢりする砂浜に身を横たへて、薄る雲と消え行く帆とを眺めながら、私は獨語する。「この仄かに燃える日の匂ひ……遠く、四國の山が夕陽のなかに揺れる。音もなく滑るヨットには、暗紫のボネット。誰かが幽かに海上で話す聲がする。ヨットのつへでか? いや、もつと遠く、もつと深く、夕陽が青く輝つてある波のはるかかなた……」

黄昏の海を見るとき、黄金の人魚の匂がこえる。黄昏の松原を見るとき、長い髪の毛を解く音がする。



かつての防潮堤を残した現在の臨港線

### 五月の海岸線

村上春樹

「ねえ、もう二十年も昔になるかな、夏になると僕は毎日この海岸まで裸足で歩いて通ったんだ。海水パンツをはいたまま、家の庭先から海までの道は恐ろしく熱くつね、びんびん跳びながら歩いたもんさ。タタもあつたよ。焼けたアスファルトの路面に吸い込まれていくタタの匂いがたまらなく好きだった。」

(「カンガルー日和より」)

村上春樹(一九四九)

小説家、京都市生まれ、西宮市立香炉園小学校・芦屋市立精進中学校・県立神戸高校・早稲田大学文学部演劇科卒業。

昭和五十四年、風の歌を聴けで、群像新人賞、同五十七年、羊をめぐる冒険で野間文芸新人賞、同六十年、世界の終りとハードボイルド・ワンダーランドで谷崎潤一郎賞を受ける。同六十二年、ノルウェイの森が空前のベストセラーとなり、平成十八年にはフランス・カフカ賞を受賞し、ノーベル文学賞の候補者となる。

### 芦屋にて

生田春月

「茶屋芦屋から浜芦屋まで、阪神電車の踏切を越して、村後場の前をすつと海岸まで導いている真白な広い道と、芦屋川そののみちとの間が、細長い遊園地になっていて、白い松林の中には、休憩所があったり、テニスコートがあったりする。夏になると、小学校では、机を出してここで授業をするのだといふ。いちばん自由な林間学校である。芦屋の児童は幸福だと思ふ。」(新潮社、生田春月全集8)

生田春月(一八九二～一九三〇)

詩人、ツルゲーネフ、ゲーテ、ハイネなど翻訳が多く、特にハイネの研究に優れる。

「芦屋にて」は、公光町に住んでいた大正八年から十三年までの朝日新聞記者のころの作品。

昭和五年、小豆島近くを航行中の重丸船上から投身自殺した。



芦屋川河口付近

1月 広報ガイド

芦屋市広報番組 あしや30 min. (サテライト)

新春特集	芦屋市政 財政再建への道のり 平成19年 新春市長対談 山中市長 vs 市民文化賞受賞者	8:00 11:30 16:00
トピックス	山手小5年生 カレーに合うブレンド米開発・発売!	19:30 22:30
市民の時間	市民を見守り続けて90年 地域の相談役 民生委員・児童委員	ビデオ テープ 貸出可

番組に関する問い合わせ 広報課 緯38-2006 CATV全般に関する問い合わせ 機ケーブルネット神戸芦屋(U:CO)カスタマーセンター 緯0120-13-8160

ヒュ・マンライツシアター - 「博士の愛した数式」

日時 1月27日(土) 午前10時30分～午後0時27分 午後1時30分～3時27分 会場 上宮川文化センター・ホール 定員 先着各100人

内容 小川洋子氏原作、小泉堯史氏の監督・脚本作品 / 80分しか記憶もたない天才数学者博士と家政婦とその10歳の息子。驚きと喜びに満ちた日々が始まった。永遠に心に生き続ける「至高の愛」の物語 出演 寺尾聰 / 深津絵里 / 齋藤隆成 / 吉岡秀隆 / 浅丘ルリ子

問い合わせ 上宮川文化センター 緯22-9229(上宮川町10-5)

現代版人形浄瑠璃「鬼ひめ哀話」

こころの闇を笛が裂き三弦が震え、人形が狂い身悶え、清澄な地唄が語る。現代邦楽の生演奏と、多彩な人形表現との融合。小学校高学年から大人向けの民話を題材に、人形浄瑠璃を現代風にアレンジした人形劇です。

日時 2月10日(土) 午後6時開演 会場 ルナ・ホール(全席自由) 料金 2,500円(当日3,000円) 出演 人形劇団ボポロ

役所売店、モンテメール大蓄、ローソンチケット(Lコード58930)

問い合わせ 市民センター 緯31-4995

芦屋ゆかりの名優達

「谷崎潤一郎と歌舞伎新派の名優達(六代目菊五郎・花柳章太郎ほか)」の写真・遺品等を展示。(監修:河内厚郎)

期間 1月6日～31日 <月曜日休館>

時間 午前10時～午後5時 (最終日3時まで) 会場 谷崎潤一郎記念館・ロビー 入館料 300円

花柳章太郎遺品 / 弁慶羽子板

問い合わせ 谷崎潤一郎記念館 緯23-5852

消防出初め式

日時 1月14日(日) <式典> 午前10時～ / <パレード> 午前11時15分～ 式典会場 精進小学校体育館

内容 <式典> 優良消防団員表彰・少年消防クラブお神輿パレード・精進中学校吹奏楽部演奏 / <パレード> 山手幹線 精進小学校から宮川まで 消防本部・消防団車両による火災予防広報パレードを実施 各消防団管内(山手・精進・打出・岩園)パレードは、各消防団管内で午前11時45分から実施

雨天時は式典のみ実施。<写真コンテストは中止>

問い合わせ 消防本部 緯38-2095